し。政ゆるきに過ぎぬれば。あつさもさむさもゆるく。政ながるれば。季候のうつるも正しからぞなどいふ。天人一理なればさもあらんかし。また政にあやまちあれば。大空のとがめありといふも。あやまちしるものはせめをみる。あやまちしらざるものは。せめをもしらぞ。いつもゆたかにてわざはひなしとぞ。たま〳〵わざはひしりてもむかしのためしなどいひて。こゝろにかけぬともがらは。つひに身にかゝるわざはひとなりぬるとかやかたりし。かんぞなんどの大空のことなどいひて。人をせめしためしあれば。なしとはいかゞいはん。されどもまた大空のかへりみをうくるものはよくそのせめをうるとかやいひて。かぞいろのわが子をよくそだてなさんと思へば。さま〴〵をしへみちびくまゝに。あるはいきめきてのゝしりなどすれど。わが子ながらもおもひそつる時は。むつがる辯をもなきぞ。さればかぞいろのせめなしと思へば。つひに大なるわざはひをうるなり。禹水湯旱とかいふごとく。聖はなほそのせめありて改め給ふことも速なるべし。ことにかくても民草のうれひ少なきをもて。たふとしともいふと。またいひし

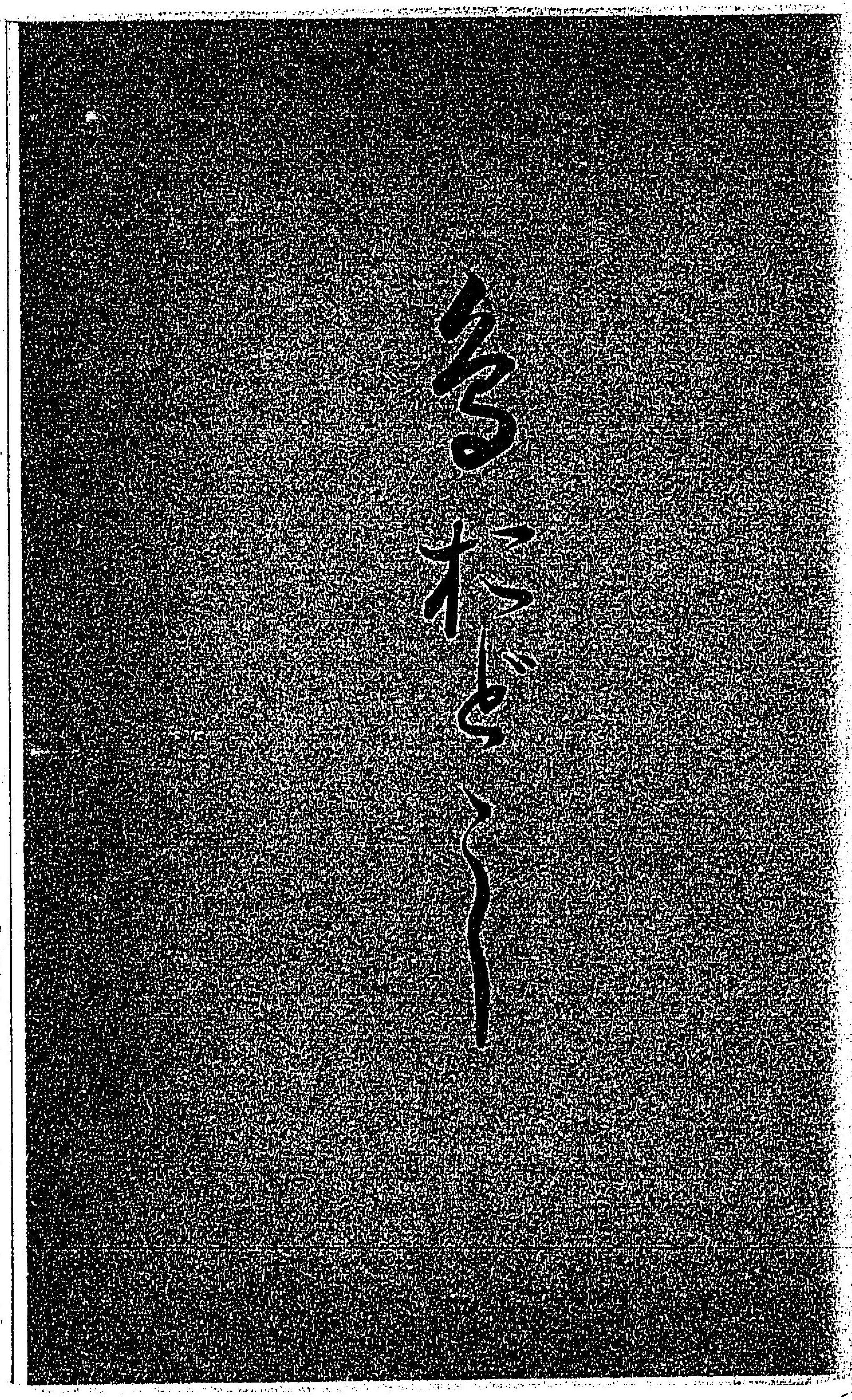
いせものがたりは梅のごとく。源氏ものがたりは櫻のごとく。さごろもは山吹のごとし。つれ〴〵ぐさはくす玉につくれるぞなのごとしと。ひとはいひけり

わがあしきをば桀紂をひきてなだめ。人のよきをば堯舜をひきいでゝとがむ。かれはかゝるあしき事なしぬといへば。げにさあらんといふ。このものかくよきことし侍りぬといへば。いかゞあらんいぶかしといふ。げにも人はあしき心あるものかなといへば。よき名得まほしと思ふが故に。人のあしきにて。わがこゝろをなだめ。人のよきをばねたむよりいでくるなりといひし

もろこしの君と臣とのみちは。わが國のとはたがへれば。いひわくべき事にはあらねど。范蠡がいさをとげてのち。船にのりてさりしを。かたきことのやうにいへど。代々のいさをとげし人のをはりよからぬよりみれば。よしとはいはん。されど船うかべてさることだにならば。かたきことはあらじといふを。よきをばよきになしてみ給へ。よきをもそのうへのことといひてせむるは。いとあしき心ぞや。聖ならではゆるをひとはあらじと

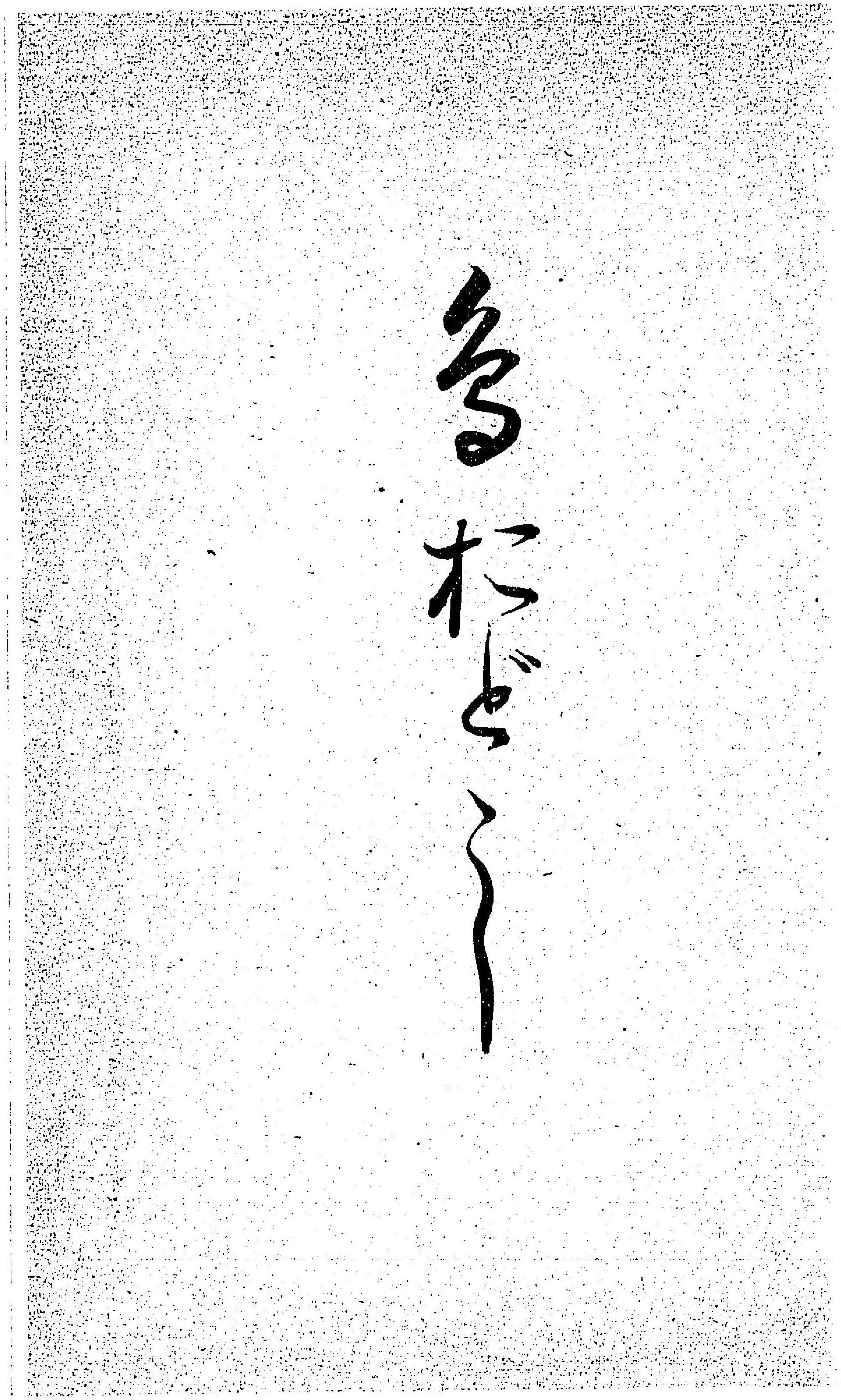
けふはいとのどかなり。いでやすみたがはらの花みんと。小船にのりて行きたるが。花みんとたち出づる。もろ人のさまげにみやこのみやびを盡せり。さま〴〵の心々に打ちむきて行くに。女房なども何か口たゝきつゝ。心そらにありくもあり。馬そせて花をめにかけぞ。いとむうぞくに行くもあり。やごとなき人にや。人々打ちかこみてつゝましげに

行く女もあり。あるは木かげにてそやひさごかたぶけ。何やらんやたて出だしかいつけ。かうよりして花の枝につけて。われはがほなるふぜいなるもあり。けふはげに晴にそれて。一天に雲なくふじも。つくばも手にとる計にみえたれど。またそれを打ちながむる人もなし。ましてかく晴れたる日はとみに雨風のあるなどいふことは。露思ふものもあらじかし。このゝどかなる御代の春の御恵にぞ。かく心ゆたかにたのしび遊びて。かへさわそるゝ計しても。何のわづらひもなきに。此のそなもむかしよりつきぬ御恵。深き露に生ひそひしとやらんもきけば。さ思ふ人もありやなしやとみれど。王世の民の心とや。かゝるてる日の恵をば思ひもよらず。いつもかく空そるゝものと計も思はぬ輩。おほからんなど思ひかへして。よもをふと打ちみれば。つくばねのあたりいとほそくひらめきたる雲こそありけれ。この雲よ。世にいふそやてなどいふものなりけり。餘りに朝よりめづらしく晴れたる日なればとて。かねてみのもかさもそなたでゐしが。そやろをしたてこぎかへるを。いかにこの花をみすてゝかへるは。かりがねにつらさやならへる。ろの音計まなべよかしなど。口々にわらふを。耳にもいれで漕ぎさりぬ。いつかその雲のいとひろごりてけるが。かのともがらは露もしらず。日のかげろふもしらず。けふはあつき計なりとて。そだぬぐもあり。又そ衣などぬきて。そせありくもありぬべし。雨に先たつ風のひと通り吹き落ちたれば。これ花よと思ふものもなく。いさご吹きたてたればたゞおどろきてゐるがうちに。雨のふり出でたり。初めはこゝちよき雨などゝもいひたらんが。のちには人の聲に雨の音もせず。馬をそせてかへるもあれば。おどろきあわてゝ。提よりまろびておつるもあり。女などはいといたうみぐるしきまであわてふためきて。そじめよそひしをもみづから夢とや思ふらんさまなる。まして酒に醉ひてぬるゝもしらずがほにわらひなどをるもあれば。思ひよらぬおろかなる雨かなといかりのゝしるもありぬべし。かの舟は早くこぎ行きぬれど。わがそむ浦は遠ければ。とある橋の下に船とめてゐしが。橋の上など人のそしりさわぐは。なるかみのやうに聞えぬ。そや雨もかぞふる計に川のおもにみゆるころ。夕月のことさらに新らしくみがき出でたれば。そや雨のなごりもなし。提の花いかゞあらんと。こぎかへしてみれば。その北はそや人もなし。櫻のこのまにほのぐゞと月のみえたるは。わが爲につくりなしけんと思ふ計なり。ぬれにし人は。いかゞしたりけん。この月などは思ひもよらであらむなど。ひとり思ふも何となく心おごり行きぬ。かぞいろもわれひとり人にこえてこゝちよしと思ふときは。とゆましめ給



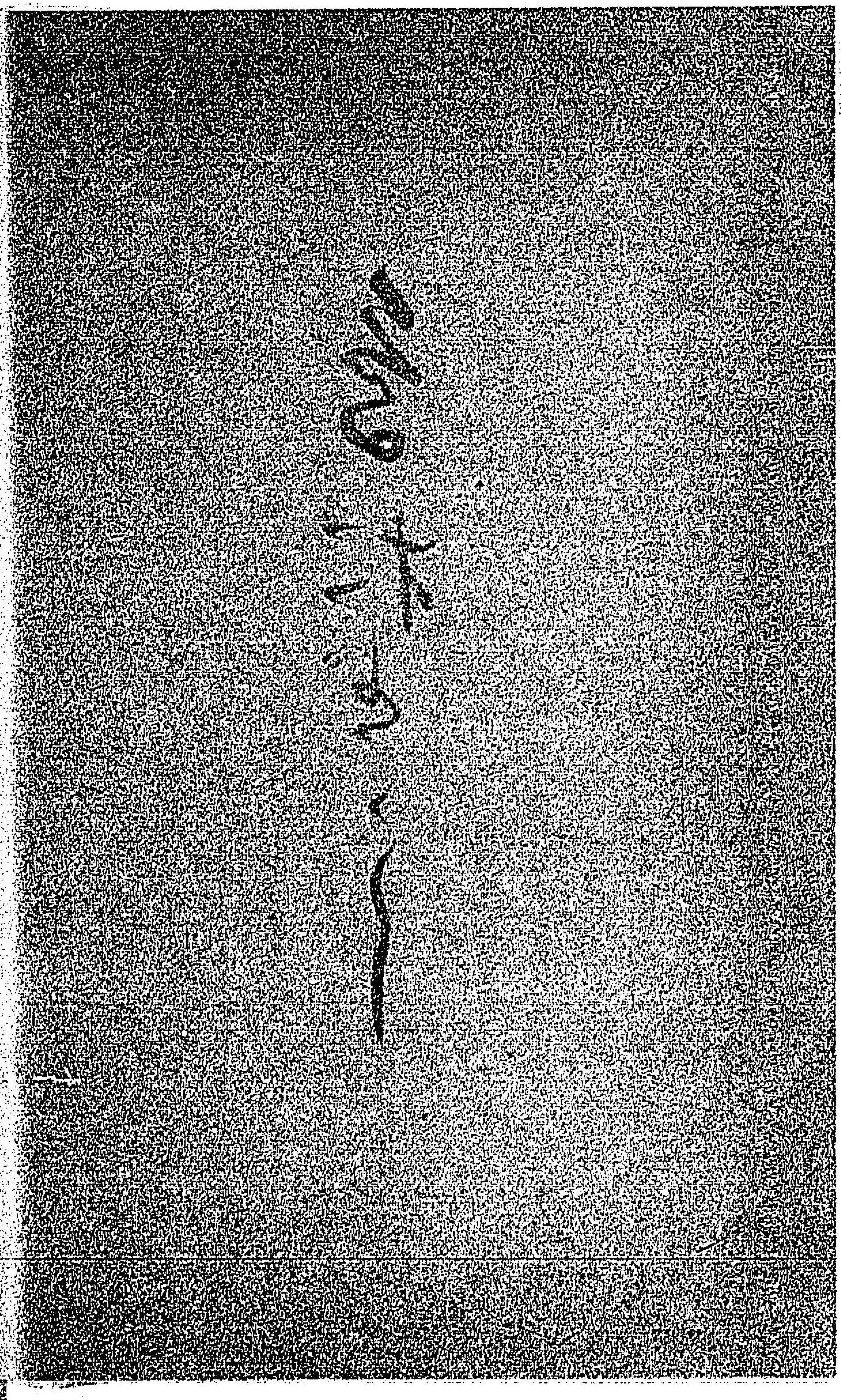
ひたれば。またあやまちやしぬべくとおそろしくおぼえければ。のみ残したる酒携へて。
つひまこぎかへりぬとか

花月草紙　終



ひたれば。またあやまちやしぬべくとおそろしくおぼえければ。のみ残したる酒携へて。つひよこぎかへりぬとか

花月草紙 終



○川崎重恭　小林元儁小傳

川崎重恭小林元儁の小傳世に傳はらず其の子孫も明ならねば委しくは知るに由なし今平田篤胤の門人の名簿によりて僅に採る事を得たり重恭は江戸の人通稱を源三郎名を勇次郎とよびき寛政十二年庚申の年に生れ三十三歳にして天保三年七月三日歿しぬ元儁は下總の人生死の年月を詳にせずこの人嘗て夢々物語といふ書を著し幕府の追捕を恐れて深川潜藏と改名せりとぞこの二人世に在りし時何人のすさびにか匿名にてかの「しりうごと」といふ書を公にして大に國學の諸大家を誹謗せり篤胤もまた其の筆端にかゝりければ重恭師弟の情もたし難く憤然として筆をとりてこの「鳥おどし」を草したるなりといふ鳥おどしは紫山子の義なり其の何故に紫山子をとりいでたるかは本書を繙かん人おのづから知り得べしまた屋代弘賢も同じく匿名記者の材料となりたれば元儁は友人なるをもて友誼上これが辯駁を草して金剛談と名つけたるなりとぞそは空海に託して辯じたるが故なるべし重恭元儁及この二書につきていひ得べき事おほかたかくの如しなほ大方の識者を待つ

因に記す「しりうごと」の著者はさきに大槻氏の説によりてしばらく小林歌城と定

めたりしが今或人の説を聞くに府下駒込西教寺の住職其及淺草田甫の西徳寺の住職其の筆になれるものにて重恭の助筆せるものなりといふたゞし重恭の助筆せるは平田篤胤以外の事なるべしまた「辨後言」は六樹園の門人花垣幸國の筆にして岡部東平の助けたるものなりといふ

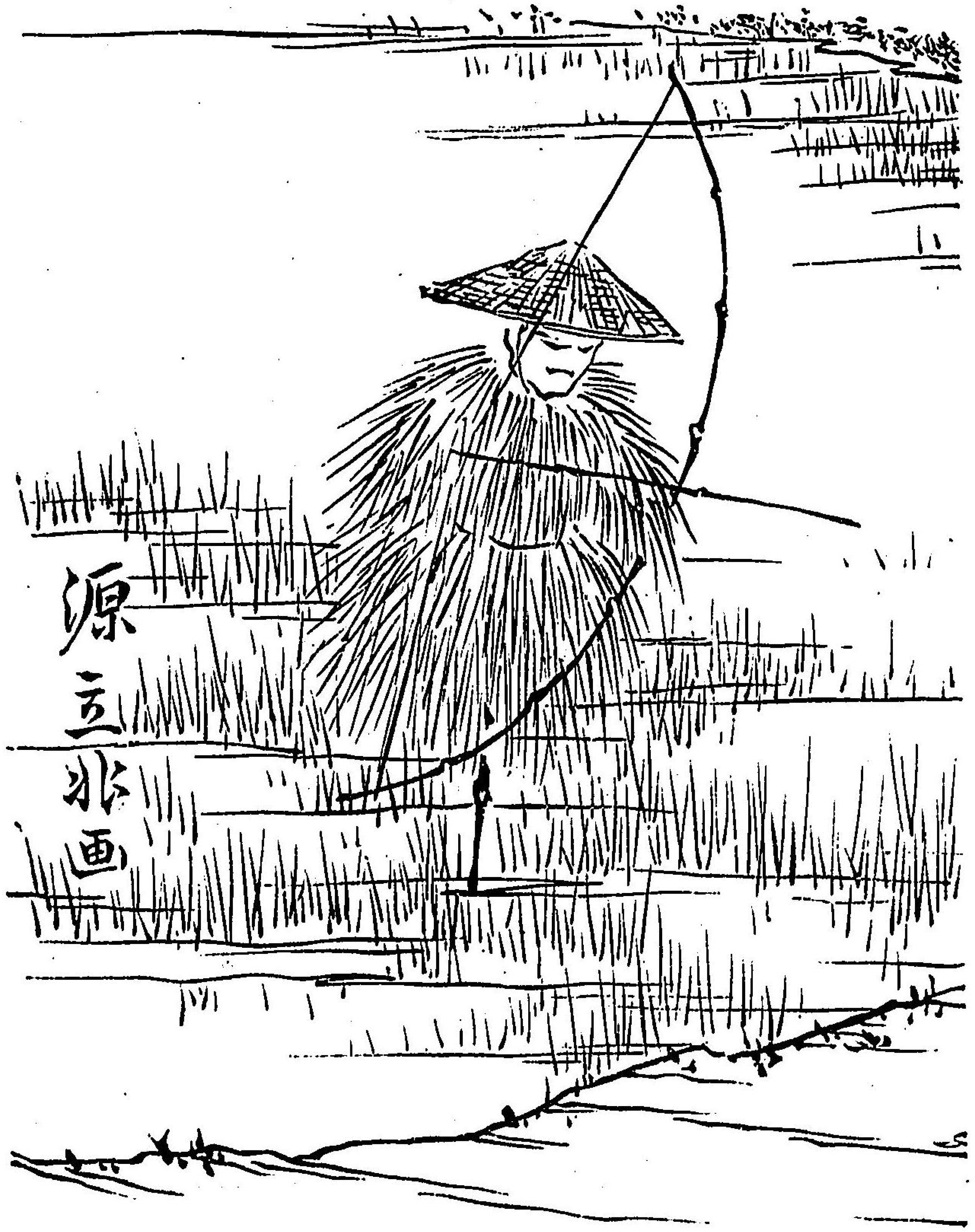
鳥於度志序

石の上古しと學び。今はもよ真盛りになりきて。鶏がなく吾妻の極み。不知火の筑紫の限り。押しなべて。至りいたらぬ里は無りけり。しかれば大御國の學は。春山の花のふくめるが朝日に匂へるごとくにさかり。戎國の學は。秋川の螢の夕月に光りかくるゝがごとく。衰ふるを。嚊や漢腐（カラクダ）人の心もて。後言といふ書をあらはして。世に名高き大人を誹れることありけり。そが始に平篤胤大人を打脊（ウツセ）貝なしごともて。論らへるを。源重恭面ほてりて。うしの答ふみをあらはせり。後に得て我見るに。學の道に志高く。さとり廣きをめで歡びつゝ。知れる人に尋ねけるに。往し年。若くして早く顯世（ウツシヨ）を去りけりと聞きければ。彼の功のいたづらにならんことを思ひて。かくぞしるしける

古しへまなびをる人どもの。此ごろかにかくにさたをる。しわうごとてふ書をとりて見れば。中に聖徳の皇子の御名をかりて。吾が伊吹廼屋の大人のまなびのをぢどもを。負氣なくも。しりうごちたる。をそ物がたりひとくだりあり。あやしくかしこくも。かの皇子を物しらぬ人にしつる事哉とおもふまゝに。とく師に見せまつれば。あなはかなとて打ちやり給ふを。いかで答へぶみかきてましと乞ひまをせども。えうなきわざなり。さてやみねとて。ゆるしたまはず。かくてももだしえあらねば。いかにかせむと思ふ〳〵寐たりける夢に。日ごろ師のいつき給ひて。まなび子どもにも。此神かしつき奉れと。をしへさとし給へる山田の曽保騰久延彦の神あらはれて。川崎々々と呼びおどろかし給ひ。かのふみのいとつたなきがをかしけれど。世のしれ人どもは。うべなひおも

天保九歳といふ歳の神無月十一日

越智宿禰通澄


源豆兆画

ふもあめれば。これよみて見よ。笑はざれば道とするに足らずといへるも。むなしからで。かくさまにひとをそしりごつなむ。いよ〱ます〱。その人のひかりをますわざなるを。同じくも。このそしりごちつるたふれものに今一きはの學びをそへて。おもふまゝにあげつらはせたらましかばとおもふも。吾が天の下の事ども。こと〲に知を得つる真心にこそ。いとをかしやとて。重恭にかさへたまふをみれば

鳥おどし

川崎重恭著

○豊聰耳の皇太子。平田篤胤をのゝしり給ひてのち。意氣揚々として。これより淺草なるある寺の太子堂に赴かせ給はむとて。かの甲斐の驪駒に鞭を加へ。天津空を翔りて。いそがせ給ふほどに。御前に侍りける。秦の川勝みだれ緒のわらぐつの紐とけたるを結ばんとて。一足二あし立ちおくれたりけるに。中田甫とかいふめる所の。田の畔より。川勝々々と呼ぶものあり。こはいかに。今末の世になりて。まなみ川勝らがことを。かうざまになめしく呼ばんものあるべしともおぼえず。何ものにかあらんと。頭をめぐらして。雲際よりよく見るに。吉原の廓へ通ふあやしのあをだかきつるゝ人聲のみして。此あたりには人げもなければ。いとあやしみて。吾がひが耳にやありけん。御供におくれんはあるまじき事と思ひなりて。行かむとするに。また川勝々々と呼ぶ。心迷ひにやとおもへど。佇みて猶よく見れば。この畔のほとりに。破れたる簑うち著て。竹の笠うちかづき。手に一張の竹弓をもちたる。一箇の案山子の立ちたりけるが。それが聲ふり立てゝ呼ぶなりけり。あや

し。上れる代に。岩根木草のことゝひしけんは。吾も聞き傳へたるのみなるに。こやつ何物のかゝりて。まどはかすにかあらん。聞かで過さんはおくれたるに似るめれど。様こそあれと。雲間より下り立ちて。そのかたはらに近づきつゝ。吾名をしば〳〵呼べるは。汝なるか。何事のありて。人まどはかしに。御供をばおくらかさんとはするぞといへば。紫山子聞きてまことに吾が呼べるなり。さるは聖徳皇子はる〴〵に天王寺よりものして。篤胤をのゝしり給へるを聞きたりしに。いとかたはらいたき事の多かるを。おことにそのよし說き聞かせてんとて。こゝへは呼びつるなり。まづはじめに。篤胤が靈の真柱の事を

靈のみはしらといふ書は。ある人に歌にだまされて云々と擧げられつるは。石川雅望がたはぶれによみつるにて。實は打つ音におどろく人の云々といふ歌なりけるを。とほく天王寺にて聞き給へる故に。ひが耳してだまされてそは聞きたまひしならむ。さてその時齋藤彦麿が篤胤に代りて。「おどろかぬ人ぞ中々おろかなる。天地にひゞく篤胤が島」と返歌したりけるによりて。雅望はふたゝび口を開くこと能はざりき。人の事を論じ給ふぞならば。さる歌の贈答の事をも知りていはるべき事なり。さるひが耳なる故に。かの真柱の書をも。なま〳〵に聞きしり給へるものとおぼしくて

たとへば舟にのりて海路をゆくに云々といふ新說を立てたるにより云々と。漢土の上古にはやくさやうの說ありし事なり

などいはれたり。篤胤もとよりさる舊說の漢土にある事をとくしれりし故に。かの真柱に。これ事舊りたる譬なれど。せめていふなりと書き。またそのまた〳〵に外國人の說に似たるは。彼が強に考へたる說の。古傳に合へるにこそあれといひしを。皇子は見給はざりけるにや。かたはらいたき事なり。されば

汝が師の本居宣長が說と矛盾して。一家を成さんと謀りしこと。掌上に見るがごとし

などいふ論は。笑ふに堪へたることにて。本居宣長が語に。わがをしへ子とあらんもの。我が後によき考の出でんには。吾說になづみそといひて。をしへ子どもの中より師說のいかにぞやおもはるゝ所を。論ひ得る事あるをも。いはゆる後說として。よろこび居る宣長が本意なるをも悟らで。またかの真柱は。服部中庸が三大考を主張したるものにて。その三大考は。宣長の世にありし時の撰みなる故に。そのおく書に。かくてこそ。高天原も夜のをす國も。明らびぬれとほめたゝへたる書なることをもしらで。篤胤が新說のごとい

ひ破り。いひ消んとし給へるは。ひがごとなり。こゝをもて篤胤が俗稱の大角といふをも
其實は。かの役公小角が。鬼神を駈役したる神變を慕ひ。小角より上に立たんとの下
心にて。大角と名乘しなり
と云はれたるものなり。實に天の石笛を得たるによりて。大角と改めしこと。石笛記を見てもしるべけれど。篤胤もとより鬼神の情態をうかゞひ。天地の化育を贊參する道の大義に目をつくる大俊傑なるものを。いかでか小角が小神變を慕ふべき。たゞし篤胤近ごろ。かの小角が弟子の義元といひしが。神龜元年にしるしたる。役行者本記といふものを見たるに。小角者幼名也。敢無成長之諱。其父名大角。其家世々長於聲韻之曲。故字。大角此云腹笛。小角此云管笛とあるは。おのれ石笛を得て。大角と名稱れるに暗合せり。世人もしこの書を見てぞ。此名をおそひ取りつと。識りごちなむなど云ひ居れば。この文をひき。また天文の書類に見ゆる大角星のこと。また角音に大小あること。また古へ大隅を大角とかきし事などをも。穴ぐりたづねて。識りぐさとせらるべきに。太子の好み給ふ佛法ざまの古書をだに見給はむ。大角星の名をさへに知らで。いかでか篤胤を論じ得らるべき。さて篤胤が開題記に。太子馬子などの事を論へるぞ。林羅山翁の說に。太子馬子は同志の人

なりといへる語に本づける說にて。實に金玉の確論。千古の卓見なるが。また其功をもあげて釋日本紀なる。上宮太子全依經史之例云々の文をひきて。其語の出處をいはざりしかど。太子それを取られたりとみえて。其文のまゝにあげて。中古の者もほめたるなりとほこり。文の出處を云はれざるは。孫引の證といふべし。しかしてこの君しきりに御自の尊重にほこり給ひて

その國に居ては。その大夫をだも識らずといふ義に戻れり

など。失敬を咎め給へるぞ。八耳ともあらぬ愚痴の御こと葉とこそ聞ゆれ。そは宣ふごとく心得たらんには。書をよみ古を考へんに。その人々のつかさ位をよく記し明めて。かの人はつかさ高ければ。このひが事あれども。云はでありなん。この主はやごとなくましませば。道に害ある事なれども。論ふべからむとやうに。口を閉ぢてあらむか。さらむ尚古考究の道長くたえて。學問の道いと狹くなりなんかし。さる愚痴におそるる故に。此上にも。

神代字用ふべくば。今こゝろみに用ひてみよ

などやうの。頭を解くむかりの語をむいはれつるなり。げにも太子のいそしみ給へる故に。今の世漢字を口用にあて。簡便なるに似たれども。はじめより漢字を用ひむして。神代

字のみ用ひ馴れたらんには。固より四十七音の假名なれど。たより宜くて。かの天竺はさらなり。其より西なる國々の。今もなほその國字のみ用ひて。煩はしともおもひたらぬ如く。いかでかその婉嫚なるを嫌ふべき。天津そらをも翔り給ふ太子の。西浄なる人どもの。漢人は世のかぎり。其國もじの義をしり盡すこと能はずと。かの國もじの煩はしきを笑ふ事をば知り給はざるにや。已に立ちたるまゝにこゝに在れども。能くきゝ知れるものをや。然るに

汝ももてには漢字を用ひて。文章をなすにあらずや

と云はれしは。殊にをかし。それ漢字をもては久しく世に用ひなれてある故に。書は通用をもて專とすれど。篤胤も世のなみに。漢もじを用ふるより外なきにあらずや。また

寅吉といふ小僧を。何國からか呼びよせて云々

と云はれたるも。心得がたし。これもとより江戸の生れにて。さる奇童なることて。岸本のゆづるが見つけいだし。夫より山崎美成がいへにおきて。かの男が平兒代答といふものにかきあらはせるを。篤胤もとより古今妖魅考をあらはして。其界の事どもを論ぜんとせるほどなりしかば。世の人の天狗小僧とて。あるは恐れ。あるは山事と譏るを。事とも思はれど。奴僕の如くめし使ひて。さるかくれ里のことゞも聞き得られたる事も有るなり。是また篤胤が道をおもふ真心大きに人の意表に出でたる處なりかし。さてまた再生の事を

かの真柱に。人の魂は云々。再生轉生するものは無きやうに。説を立てたる處に云々

といはれしは。いみじき不學の太子なりけり。靈の真柱の書の中に。さる説をしるせること。何處にかある。また再生の事をば。かの真柱を作れるよりはるか先の。篤胤いまだ三十未滿なりし時に書ける。鬼神新論に。既に再生もある事のよしを論じおきて。再生説聞にいへるにおなじ。然れどかの太子は。鬼神新論はさらなり。靈の真柱をも。よくは見給はざるなるべきを

尻口で物をいふといふ物なり

などいひて。御身が慧思の後身なるよしを。再生記聞に書かざることを恨み論ぜられしは。實に笑ふに堪へたる愚論なり。そは元亨釋書太子の傳の論に。思大陳大建九年滅。太子敏達二年[癸巳]誕。以曆考之。太子五歳時思公化。豈有未死而受生於佗方哉といへり。但し同書に。この下に十二因緣經などを引きて。しひて慧思が後身なりと云ふ説をたてんとし

たれど。それは例の附會の論なれば。今は年暦をもて證とするなり。慧思いまだ身まからざるに。太子此國に誕れ給ひ。のち五年をへて。かの僧の死(まか)りたらんをば。いかでかその後身なりといふ的證にはなるべき。此事の辯は。書紀の通證をはじめ。あまたの書に見えたるを。太子みづからの前生の事をだに知り給はで。篤胤が事をかにかくに論ひ給ふべきことかは。然ればやまとの漢の代々の撰史の例をもしらで。古史の撰びざまを論ひ。そがうへに

自家の作書を公然として講釋するなどは云々

などいはれたるは。篤胤が講席のさまを。人づてに聞きて論じたることならん。篤胤つねに古史の徵をば講せむ。その成文は古說を集めしものにて。うひ學びの人には。注なくてはよみ解くべきにあらねば。をしへ子どもの請ふまゝに。その注書どもをよみ聞かするわざなり。またよし元より實にみづから作る書にても。人に講說しつることは。漢土には宋の真徳秀が。その著せる大學衍義を講じ。皇國にも淺見安正がみづから撰べる靖獻遺言をときて。其講義をもしるせるなどの。ためしもあるを知らざるものなり。さて涅槃經の事。また今昔物語なる松室の仲算が事。ある人法華經を校正したる事の論などは。竹尾覺齋が說なるを。太子ひそかにかいまみもし。或はその說を聞きつたへて。こゝへはとり出でられし物なり。この說どもは。覺齋がために備書せるものゝ見おぼえで。吾に語れる事ありき。そはとまれかくまれ。篤胤にあづからざる事なれば。今はさしおくなり。然してまた

仲景考といふ物などは。元より牽強附會のことにて。論ずるに足らず

と云はれしは。謂ゆる負をしみのこと葉なり。さるは孟軻が語に似たれど。譬へば方寸の小いしをあぐる力なる者の。方丈の大石を見て。こはもたぐるに足らずと云はむに。誰かその言をうべなはむ。かならず其はあぐるに足らざるにあらず。あぐること能はざるなりと。嗤はむがごとく。かの書を論ずるにたらずと有るも。まことは論ずること能はざることと。已よく知れる故に。負をしみのこと葉なりとは云ふなり。さて佛頭に糞を著くといふことわざは。太子の降りませるを。天神下降とこゝろえたらむには。糞頭に佛を著くともいふべき事にて。冠履所を異にせるものなり。また太子の上り給へる後。篤胤目の上の瘤をとられたる心もちになりしといふもいとをかし。目の上の瘤を取られつるとは。思ひ屈したる事のありしが。ほがらかになりしをいふ事なる故に。こゝには當らず。かゝる

諫を用ふべき格だにしらせ給はぞば。かくざまにうまつからしの寄り道せさせ給ふべくもあらぞ。あなをこの太子や。かたそらいたのしりう言やといふほどに。川勝は吾にもあらで。弓をふせ箭を捨てつゝ。おん身は山田もるそほどゝ思ひしに。いかにしてかく太子のあやまち給へるすぢをしり得給へる。已いそぎ參上りて。このよし申しあらはし。あやまちわびさせ奉らむ。此事ゆめ人にな語り給ひそといへぞ。棄山子から〳〵と打ち笑ひて。知らずや吾はこれ足はありかねども。天の下の事をこと〴〵にしれる神なり。少毘古奈神をだにあらそし奉れるものを。この太子にかく論じさせ奉れる釋魔をも。いかでか知らざらむ。されど思ふ旨あれぞ。今はその名をあらはさゞるなり。太子はあまき（天竺）の他神をむねと齋き給へるが故に。そのみをぢ絶にたれど。おことは心ざしいと雄々しくて。大生部の多がまつりて。世をまどはせる妖むしの。常世の神ときこえしを。打ちきためたるいさをによりて。蕃種ながらもその末廣ごり。榮え傳それるによりて。人おほき中に。おとをよびてかくいひ聞かそるなれば。歸りて太子に申さんには。このゝち降り給ふことありとも。太平記の文の妄說にならへる。御出立はあるまじき事なり。黃金の大鎧などめし給はむは。治まれる世の御さとしに似あはしからぞ。かつ篤胤に返答せよとのたまひつゝ。赤檮とおことに箭鏃をむけしめて。口あかせ給はぬも。いと卑劣なる御ふるまひなりといへ。なほいふべきは。篤胤が漢土印度は更なり。その餘の國どもをもみな吾が大御國の出店なりといふは。深きゆゑあることにて。世の青々しき學者どものしる所にあらぞ。實には皇產靈神を漢土にて。元始天尊と申し。印度には大梵王と稱へ奉り。伊邪那岐大神を天常と申せるなど。その餘くさ〴〵のあかしある事なり。これ西蕃太古傳。印度藏志などいふ書に。篤胤くはしく記し置きたれど。そのかたそしは玉だすきといふ物にも記せるを見てしるべきなり。げにも〳〵篤胤は世のいはゆる小山伏にあらで。若きより手筆をとゞめぞ。目に書を放たぞ。わが神國の古傳にもとづき。萬國の古說をもらさぞたゞし明らめ。顯におて幽をさぐり。あらゆるよこさの道々を。盡く論じうしなひ。つひに妖魅を降伏しをへて。皇神のみちの真語を。世にあまねく知らしめんと神にちかひて。机上に數百巻のふみを撰びをる。真の大山伏なるを。よのつねの小山伏のごといひそるゝは。いとをこなる事なり。さるゆゑに。てにをはの格中にまどへる世の歌人らとおなじからで。あやまつ事のありげに見ゆるは。數千萬言の著述。一句ごとに。てにをはの過ちなど。正しをるべき暇なきゆゑなり。工ゝをもて。一首の歌。あるはそし書。また偶にものそる害比ぶみ

などに。さるあやまちはをさ〱なきを。知る人ぞ知りてありなん。また太子とおなじ心なる空海法師が。入らざるかしこだてに。篤胤が惡筆なるよしを。詈れることゝ聞ゆるは。ことに愚なり。さるは此法師こそ。物かくわざをいとやごとなき事におもふめれ。かの漢人も大志あるは。書て姓名を記すに足るといへるぞや。篤胤その師の志をおしひろめて。世に道のまことを說き知らしめんといたづくからに。物書き習ふいとまなき事は。其門戸に依れる者は。誰もたれも志れる事なり。そもかの拙筆なりしから人の。腕中有レ鬼。眼中有レ書と云へる。まけをしみの類ひならで。腕に鬼はすまぬものから。心ありて若きより手習ひせず。されど眼中に書あるが故に。をり〱に書論をもなすなり。すべて此法師が輪池翁の手迹をあげつらへる事どもゝ。いと愚にをさなき說の多けれど。これ別にいふ人有るべければ。我はいはず。抑これらは太子の論じ給へる事にはあらねど。同じ道を行ひ給ふ太子なれば。決めてこの法師が論に。あひ口あひておもすらんと思ふ故に。ことの叙にかくは云ふなり。よく心に記してな忘れそよ。されど猶こりずまにかにかくありうごち給はゞ。太子ともいそぎいへ。道の大義に替へがたければ。おのれ天津皇祖神たちにうたへ奉りて。妖魅のなかに交らひ給ふ。その窟巣をあなぐり尋ねて。太子をかく感でし奉れる。釋魔の本體をも見あらはし。根の國底の國べのもとつ國に。いぶき放ちなんものぞといへば。川勝て恐る〱。仰せことぐ〱く承り候ひぬ。そのよしをおほく分身し給へる太子たちに告げ參らせて。このゝち古の道の真言を傳ふる人に。射向ふ事あるまじく侍れば。ゆるさせ給へとくり言しつゝ。雲をよぢて翔りさりぬとぞ

鳥おどし 終

金剛談

鳥おどし後書

千早振神の恩頼のなかりせば。𡂖や我國學の腐人にはなづられましを。源重恭うしが足日木の山田にあみ立つる。曽保騰の神には。久方の空翔る粪鳶も翼を垂れて。杉の木末を下り。荒金のつちを走る古狐も。鹿自物膝をり伏せて。稲むらの影にかしこみぬるは。誰か功なからん。君が平阿曽美の翁を。尊みぬるこゝろの深きは。山の井の淺くはものをおもいまし。此ふみの巧は。千年經とも。いよ〳〵立山の峰よりも高からん。萬代經とも。ます〳〵千尋の海の底より深からん。

天保九年といふ年の霜月十日まり八日　　源　壽　麿

鳥おどし後書

千早振神の恩頼のなかりせば。嚩や我國學の腐人にゐなづられましを。源重恭うしが足日木の山田にあみ立つる。曽保騰の神には。久方の空翔る鵞鵰も翼を垂れて。杉の木末を下り。荒金のつちを走る古狐も。鹿自物膝をり伏せて。稲むらの影にかしこみぬるは。誰か功ならん。君が平阿曽美の翁を。尊みぬるこゝろの深きは。山の井の淺くはものをおもはまし。此ふみの巧は。千年經とも。いよ〳〵立山の峰よりも高からん。萬代經とも。まを〳〵千尋の海の底より深からん。

天保九年といふ年の霜月十日まり八日

源 壽 麿

金 剛 談

金剛談

金剛談

小林元儁著

ならざば識れといふ諺にもとづき。或人小説屋と假名して。ありうごとゝいふさうしをつゝり。揖巻となして。ある日口授せし。門人三國真並穴。粟田恒の二人をよび。文机にかゝりていと〱ありたり顔にのゝしりあへる處へ。一人の老僧来りていへらく。貧道(われ)は紀州高野山にすめる空海なり。汝等此頃江戸に於て。現在名高き國學者どもをありうごちて。一冊子をかきぬとか。それにつきて小ざかしき佞辯の法師をかたらひ。空海が名をかたりて。屋代弘賢が許へ遣し。傍若無人に。あらぬひがごとをときちらしゝよし聞つるまゝに。其賢否を糺さんため。かくわざ〱来りしなり。弘賢は書道に於ては。空海が教を守りて。よくわが心をうかゞひしりたる者なるを。汝等いかなる恨ありてか。かゝることには及びしぞと。にが〱しきおもゝちにて。文机の向うにたゝせ給ふ。三人はおもひかけぬ事なれば。さながら夢のやうにて。これ此ほどより此草紙をつくるにつけて。大師のうへをも。とやありけん。かくやあるらんと。さま〲心氣を費したる故。かゝる迷のおこりき

ぬるならんと。おの／＼心をしづめて見るうち。いよ／＼傍ちかくより給ひつゝ。御辯をするどにせめとひ給へば。三人はにはかに物おそろしく成りけるまゝ。低頭平身して詞なし。しばらくありて。小說屋頭をさげていへらく。おのれらまつたく弘賢翁に恨は侍らざれど。かの人の書道におきて。大師の御敎にそむける事の有るをさとし申さんとて。かしこくも御名をかりまゐらせて。かゝるしざには及びしなり。則その書これにとて。おそる／＼さしいだすを。大師やがてとり上げておし開き。全篇を一讀して冷笑し給ひつゝ。の給ふやう。さて／＼汝等は腹黑なる者どもかな。こは此人々のいづれも學才ありて。世にめでたふとまるゝを。妬ましく思ふこゝろより。こぢつけにまうけ出でたる虛論なれば。心ある者。誰かは信用すべき。また論中たま／＼あたれりとみゆるふしは。其人にとりては。枝葉とある小疵にて。全體の難とすべきにはあらず。古語にいへるごとく。智者も千慮のうちには。いかでか一失なきことをえん。それをあなぐりもとめていはんとするは。いと／＼心ぎたなし。歷代弘賢も。かゝる妄說にまよはさるゝ者にあらざれば。うちすておくべけれど。かくきたれるついで。かつ汝等が後學のためにこ。此一論の作をあらかじめ空海がとき聞すべし。つゝしんで拜聽せよ。先其方が論に

すでにふでをなすに。單鉤をもて第一とすることは。空海が論に。俗にこれを包筆と云ふ云々。ひとへに第四五の指を壓すなり。これを掣りて腕せざらしめん事を欲す。そのこれを執る事至牢なることをあかせり。但し小指力微にして。久任に堪へず。凡。此勢をなせば。掌おのづから空し。たま／＼其虛にあたれば。粗又輕快なり。すでに其理をしりて。其微にいたるべし。もとより單指の力ひとしくもつて。長久に困まざるべきにしかずと云々

此又單鉤を第一とする事をいはんためにて。雙鉤の論の末にもとより單指の力ひとしく。もつて長久に困まざるべきにしかずとあるを引きて。單鉤の全論をあげしなるべけれど。はじめなる俗にこれを包筆といふとある上に。單鉤を論じたる條にといふ辭なくては。單鉤雙鉤の論。混じて聞ゆるなり。また掣の字とつてとよみしも誤なり。弘賢がひきてとよまれしぞ空海が意にはかなへる

又次の論に。凡爲二此勢一とある勢字。弘賢が釋文に。執を埶と書きて。勢の省文と注されたるは。あやまりにて。なほ明二其執之至牢一と有る執の字也との論

いかにも空海が書釋には。執とかきたれども。これは弘賢が勢の省文と注されたるもわ

ろからず。弘賢が先年。此書校正の時。岸野栗山に相談せられしに。こゝは勢といふ方まされりと答へられしこともあれば。しばらくそれにしたがはれたるにて。ひが事にはあらず。よき眼の付處なり

又單鉤をよしと。空海が定めたるは云々。韓方明より直傳せし雙鉤を「單鉤にあらためて。その時好にしたがひ云々

こはいかなる麁忽ぞや。空海雙鉤を單鉤にあらためたるにあらず。やはり雙鉤は雙鉤にて用ひ。別に單鉤を首に置けるにて。二つともに兼ね用ふるうちに。單鉤を第一としたるは。皇國人の指力唐土人にまされるをもつてなり

又時好にしたがひ二王らが方勁硬賢の勢有るをとらず。別に屈曲迂回の運筆をひろめ。一機軸を出だせるのみ云々

と有る。これ下文に今もたま〳〵世にのこりたる經功の眞跡など。正體に妙處ありといへる意と矛盾せり。ことに空海は書藝をば物の數とはせざりしを。自ら妙處有るなどといふべきかは。不案内なる假託なり。それのみならず。空海が師といひし韓方明は。五種の把筆をさへ兼ね用ひられしをしらずや。佩文書畫譜に。按筆要覽一編あり。ついて見るべし

又科斗鳥形などの書を除きて。八の字を鳩の形に象るごとき書體。漢土にありとせんか云々

唐の薛稷が慧普寺の額に此類あり。くはしくは弘賢が額字說に見えたればいはず。これらの事をも知らずして論ぜるは。抱腹にたへざる事なり

又弘賢は。空海が論によりて二王らが筆論によらざるはいやし云々

といへるもたがへり。弘賢は常に晉唐の筆論を談じ。二王の書を臨して。弟子にもさづけらるゝを。汝等はしらずや

又賢は指力強き人なほ雙鉤を用ひなむ。指力ます〳〵強くして。もとより優美婉曲なる上に。また確乎として不可抜の勢を書き出だすべきものなりとて。弘賢が大字をかく時に。雙鉤をる事を難じたれば。雙鉤の力つよく。運筆自在なるが故に。中字細字に單鉤を用ふると。單鉤を是なりと論ぜると矛盾すといふべし云々

といへるも眼なきが如き論なり。弘賢は空海が單鉤雙鉤兼ね用ひし事も。執筆法に書きたるを信用せらるゝが故なり

又平田篤胤が云々。單鉤第一と定めたるならんと。古史の開題記に論じたるを。弘賢
も尤と思はれたるやうすなれども云々

これは。弘賢が釋文にかゝれたる。空海が書訣を。篤胤が見てかゝれしなり。主客たがへり
又もとより書の此國のものとならざるを思はずして。佞媚せられたる。おまけ口上
なり云々

弘賢なんぞ筆法を論ずる事は。漢字わたりてより後の事なるを知らざるべき。さてこゝ
にもとより書の云々とある書といふ名目かなはず。こゝは文字といふべきなり

又獻筆表と啓とに見えたるごとく。空海が用筆は狸毛にて。今も水筆におほくある
なり。然るに弘賢は鹿毛を用ふといひながら。馬毛筆を用ふるは。いかなる事ぞ。空海
によるとならば。その用筆を用ふべき事なるを。強翰を用ふる事あたはざるが故に。
結體に力なく。勢うすく。挑灯屋を用ひて。字形を補はるゝ事などは。はなはだ卑劣千
萬なり云々

此論も心得ず。空海が用筆狸毛に限るにあらず。書訣をみてしるべし。然るに表と啓との
言によりて。狸毛のみと思へるはいかゞ。又強翰といふは。空海が說はあしき筆のことな
り。それをもしらず。みだりにいふからかゝる誤用はいでくるなり。また結體に力なく勢
うすくと有る。此一句空海の語勢にあらず。書論を讀まざるものゝ性體をあらはせり。又
筆をそへて。字形をおぎなふ事は。大古の法なり。一筆書こそ。かへりて後世の事なれ

又弘賢が古讀に似せるを功とせざる見識を用ひず。やゝもすれば空海が古讀を襲
ひてよしとせらるゝは云々

これも弘賢が書道にいたりふかきをしらざる論なり。弘賢は唐人の書一家を學べば。こ
れを奴書とす。衆美を聚めておのれに歸すといふ事を。先師よりさづかりし次てに。迎春
帖の跋に。若夫使筆。則務使沈着通快婉轉遒媚。要會萃衆美。以歸於己。是之爲至矣とみえ
たるごとく。誰の書蹟にもよらず。おのづから一家の體をなして。摸擬の書を甚きらはる
ゝは。則空海が說を專ら用ひらるゝなり。これはおのれがよくしる處なり

又弘賢が楷書は。顔真卿を學びて。やゝ一家をなすに似たれども。行書。草書にいたり
ては。凡庸を免かるゝ事あたはず。わづかに持明院家の筆意を寫して。いはゆる旖旎
婀娜たる處をかき。虚名を走らせらるゝが心憎くて云々

これ又空海が意にあらず。旖旎婀娜たる處をかくは。則わが教をまもらるゝなり。ことに

弘賢が真事は。顔真卿にあらず。常に書を學ぶ次第を門人に教へらるゝに。唐の馮承祖。褚遂良の露鋒書にて修行し。虞世南の藏鋒書にて成就すべきなりといへり。又行書。草書は凡庸なりといふも。小學の守用なる處をしらぬ説なり。持明院家の筆意をうつしてといへるも。其家何某卿の書を學べるにか。すべて證もなき妄語なれば。委しく辯ずるに及ばず

又弘賢も一時の名家なるに。なんぞ古人に縛せられ。柔筆に坐せられて云々

是も空海が説には。柔とはやはらかなる事にて。奴筆をいふ。よわきといふには輭字を用ひしなり。然るに輭筆柔筆の差別もしらで。かくいふは。いと〳〵麁漏なり。すべてはじめよりこゝにいたるまで。一つとして的當の論なし。これ其方らが不學故なれば。あらかじめいひ聞すなり。さてついでなれば書論にあつからざることながら。つきの事どもをもしめすべし。弘賢に好事癖をやめられよ。但し文政九年に。松岡辰方が方へやられし手簡に。近来風流好事流行にて。武備をわすれ候人も可有之やと。不安心に存候などゝ。自は好事家ならぬやうにいはれしは。虚談ならん。その證は。先年孔明が陣太鼓の歌よまれしとき。大田南畝が「あな小づらにく明神下の弘賢が真名のなまにへ詠み出でつるかもとざれ返歌せしをもてもしらるゝなり云々とあるはいかゞ。弘賢は風流好事にあらず。好古の癖ありて。萬の故實を尊び。制度を守りて。經濟有用の學を心がけらるゝ事、世人のよくしる處なり。かの落首は南畝が一時の惡言にて。風流好事に詠まれし證にはならず。かの銅皷をみしも。弘賢が好古の一端なり。此落首にも誤寫あるやうなれど。それはとまれかくまれ。又年玉配の小揖物も。帝昊金や。封牛考や。日野唯心殿真跡などの雅なるはやめられよ云々とある。これも年始に略暦をくばる事。人毎のやうにて。後には不用なるもの故。弘賢が寛政年中に王蹟南二詩をすられしは。世人古書畫をくばる濫觴にて。實に略暦にまされり。帝昊金も人のあまねくはしらざるものなり。封牛考は誰やらの駱駝考を辨駁せられし功あり。日野唯心殿は。高名なる人なれども。其傳をしる人なかりし故に。ひろめられしなり。又阿育王室塔の圖をくばられし時などは。新春早々故。みな人心よからず思ひし事なれば云々とある。此論空海が意にあらず。神に本地をさつけ。いろはの無常を初學に學ばすとて矛盾せり。又富久者有智。遠仁者疎徳の十字をくばられしなどは。世人詈々として譏る處にて。義においては熟せざる句なり云々とある。これもたがへり。これは字義を用ひたるにはあらず。假名なり。ことに弘賢が造語にてはなし。もとは何人の作にか。

先年沼田何某よりたのまれて。書かれしなり。その草案には。不啓者有智とありしを。不啓の二字を取りかへてかゝれしまでの事なるよし。假名の法もしらずして。字義を論ずるなどいと〳〵つたなきなり。又かの摺物をふくさ唐紙にすられしは。平生唐紙にものをかゝぬときめられたる。見識には相違して云々とあれど。此摺物斐紙奉書紙にすられし事。皆人のしれる處なり。たま〳〵その紙のきれめに。幟にのぞまるゝ人ありて。やむ事をえず。いさゝか唐紙へすられしなり。また自運と板行との差別もしらぬ論なり。又初學の者に。真跡本をならはせらるゝ事は止められよ云々とある。この論もいかゞなり。弘賢は浪人書家にはあらず。官人なり。公務に違あらざれども。またひゆくものには。やむ事をえず。指南せらるゝ事なり。先年繁務にて。法書をつくる間なしとて。新入門をひたとことわられしかば。執心の人を導かざるもきのどくなり。せめて墨本にてなりとも學ばせられよと。檜山何がしのすゝめによりて。はじめられしなり。されど此墨本を一帖も勉強して學びをはれるものには。其篤志をみて。自運の書。又は古書の臨寫をもさづけらるゝなり。又無用の年玉くばりや。黄金を貪る事などは。心をつけて改めらるべし。しひて止事なくば。予たちまち靈をほどこして云々とあるは。いかなる事ぞ。弘賢が年始新刻には。無用の物はあらじとおもふなり。ことに黄金を貪るなどゝは。心えがたき詞なり。弘賢は一時の書家にて。數百人の門人あれども。其入門の束脩に規定なく。其人々の心にまかする事。皆人のしる處にて。これもいとよき事に思へるなり。また藏板物も。いつも費用たらずして。利を得る事はさらになし。たゞ世の益になる事をこのまるゝ故のすさびなり。さて上にいへるごとく。汝等は空海が書訣をよくもよまず。其をしへを奉ずる弘賢が說をもよくきかずして。支證もなき妄說を世に布かんとする事。そも〳〵いかなるねぢけ心ぞや。あまつさへ弘賢をなんぜむとて。空海が名をかたり。これを無智盲昧になして。無實の難におとしいれんとせし事。罰當をもかへりみざるあこぎなれども。われもとより汝等が如き。不學の小人どもを罪せん心なし。たゞきたれるついでに。其ひがごとどもをさとすなりとの給へば。小說屋は顔色土のごとくになりてふるひゐつゝ。さらにいふべき詞もなく。たゞ何事もゆるさせ給へ〳〵と。手をすり淚をながして。をがみゐるにぞ。二人の門人も。大師の精論に感服して。これこそ眞の妙々奇談なれと。はじめて小說屋が始終のひがごとをさとり。大師のまへにぬかづきて。ともに不埒をわびきこえしかば。大師かさねての給ふやう。向後汝等心をあらためて。かゝるひがわざをなしそ。また〳〵いふべき事

はおほかれど。さのみはいりるさけれバいでぬなり。されど加の職られたる人々。その名をかたられぬしたちよりは。おひ／＼乱明せらるゝであらう。あなかたそらいたしやとの給へつゝ。たゝるゝと見えしが。たちまち姿はきえうせて。そばなるさうしの表紙に。一首の歌をぞのこされたる。三人は怯然としながら。そひより見れば。さうしの名のおりうでとゝいふ五文字の折句なり

これ人の理非をまかたぬ虚説を弘法いかでとがめてつべき

金剛談 終

島地默雷
生田得能 兩先生合著

三國佛教略史

和製木版全三冊
正價金六十五錢
郵税金八錢

右書は印度支那本邦三國に於ける佛教古今の盛衰變遷高僧碩德の効業事跡等一も漏すことなく簡にして盡し一度此書を繙くに及んでは三國に渉る佛教の流傳廣布する所以隆替興亡する所以及其沿革等瞭然として掌を指すか如くならん從來佛教史と稱すべきもの印度は殆と全く之れなく支那本邦僅かに之れ有りと云へとも皆其一部分に過ぎず一も完備せるものなし況や三國を貫通して之を記せるものをや島地師夙に此に感あり數年來廣く群籍を渉獵し漸く本年に至り稿を脱し剞劂其功を奏するを得愈々五月上旬より廣く發賣するものなれば苟も佛教に志しあらんものは必す一本を坐右に備ふべきなり

英國孔理齊氏原著
日本天野鎭三郎先生譯述論評

泰西十五大決戰史

洋裝全三冊
定價金一圓廿五錢
郵送料不要

此書上ハ歴山王ヨリ下ハ拿破侖ニ至リ二千餘年間治亂興廢ニ關スル大戰十五ヲ選出シ之カ原因結果ヲ詳論シタル者ナリ此書專ラ政治歴史戰事ニ渉リ引證該博敍事精詳ナルヲ以テ英雄豪傑ノ軍謀武略ハ勿論其前戰中鬪暗啞叱咤ノ状瞭然指掌ノ如ク一閲ノ下人ヲシテ心目快然タラシム實ニ必讀ノ書ト謂ヘシ譯者久ク歐洲ニ遊ヒ史學ヲ修メ文健筆ヲ奮ヒ論評ヲ付シタレハ一層活潑ノ趣アリ今度全部三冊完備發兌候間江湖ノ諸君陸續購讀ヲ賜へ

文科大學教授チヤンバレン先生序
文學博士重野安繹先生序
文學博士小中村清矩先生著
長命晏春先生 川邊御楯先生畫

歌舞音樂略史

和裝半紙形
挿畫入全二冊
正價金五十五錢
郵税金六錢

書中目録●上古の歌舞音樂●外邦の歌舞音樂●大寶以來の内外の樂●唐土高麗より傳來の樂并我國新製の樂●神樂●催馬樂●東遊●風俗等●朗詠今樣雜藝●聲者の平家●散樂又猿樂●田樂并田樂の能●猿樂の能并狂言●白拍子其の他舞●歌舞伎狂言并能優●淨瑠璃節并操人形●三味線并筑紫琴●小唄長唄等●歌舞音樂沿革總論 以上十六章該書●歌舞音樂の歴史としてチヤンバレン先生の序に空前絶後の評あり絶後は知らず空前の評ある事は一讀して知り得べし

文學博士 川田甕江先生著

得間瑣録

白紙摺全一冊
定價金十五錢
郵税金二錢

是書ハ甕江川田博士相州三浦郡葉山邨ニ於テ養痾中ノ日記ニシテ試ニ之ヲ一讀スレバ海光山色風帆沙鳥來テ机上ノ物トナルノミナラズ考證精覈以テ史乘ヲ補ヒ地誌ヲ正スベシ所謂揮レ毫亦用ニ余力ニ者今本舗其許ヲ得テ發賣ス江湖文雅諸彦乞フ幸ニ一本ヲ藏セラレンコトヲ

文學博士　川田剛先生撰

隨鑾紀程

和装木版
美製本
全五冊

正價金一圓十錢　郵税金十二錢

此書ハ曾テ　聖駕ニ供奉シテ東北地方ヲ巡歴セラレタル甕江川田先生ノ編著ニシテ東北諸縣北海道廳管轄内ニ於ケル市府村落ノ風俗、人情、山川、路堤、土木、橋梁、古祠、廢刹、城址、壘栅等ノ沿革興廢ヲ始メトシ鑛産、紡織、耕漁、牧畜等、農工商業ノ盛衰隆替ニ至ルマテ世ノ人見テ以テ利益スル所ノモノハ悉ク之ヲ網羅シアルノミナラス其他舊史ヲ引キ古書ヲ繹ネ或ハ功臣老吏ノ偉蹟ヲ摘拠シ或ハ忠僕節婦ノ逸事ヲ發揚シ一讀人ヲシテ感奮ノ情ヲ發セシメ時トシテハ山水ノ美風景ノ勝ヲ敍シ不知不識仙境ニ遊フノ想ヒヲ生セシムル等苟モ途上眼ニ觸レ心ニ感スル處ノモノハ先生獨得ノ妙文ヲ以テ丁寧親切ニ敍述セラレタルモノナレハ一タヒ之レヲ繙クトキハ躬ハ宛然其境ヲ踐ムノ念アラシメ巻尾ニ至ラサレハ措ク能ハサルノ珍書ニシテ實ニ東北地方北海道ノ地理誌ノ精ナルモノト云モ過言ニ非ラサルヘシ而ノ章句ノ艶麗ト行文ノ流暢ニ至テハ已ニ諸君ノ熟知セラル、所ナルヲ以テ此書ヲ座右ニ置クトキハ啻ニ地理ノ詳細ヲ知ルノミナラス又以テ文章ノ良師ヲ得タルニ異ナラサルヘシ

狩野良知先生著

支那教學史略

和装
半紙形
美製本

全三冊　合本二冊

此書支那上古ヨリ今代清朝ニ至ルマテ歴代學問ノ沿革變遷ヲ敍述シ儒佛道教諸子百家ノ概旨及ヒ各代學政學風ノ盛衰學者ノ履歴其他西域諸教支那ニ入ル來由等收載セサルナシ之ニ加フルニ古今學術得失瑕疵ノ評論ヲ以テス漢時司馬遷曰ヒシコトアリ經傳千萬累世其學ニ通スル能ハスト況ヤ諸子百家歴代文籍ノ浩瀚ナル其數啻ニ億萬ノミナラス今日萬國學問ノ夥多ナルニ方リ一國ノ學尚ホ此ノ如シ學者茫洋ノ歎ナキ能ハス是ヲ以テ大ニ博覧ヲ務ムル者モ今日ニ在テハ簡易渉獵ノ方ナカルヘカラス此書僅ニ兩冊ノ小帙ト雖モ漢土教學ノ要領ヲ約載シ千萬巻ノ文籍ヲ一括シテ概表縮圖ノ如ク胸臆ニ収メ易カラシム故ニ一タヒ之ヲ播閲セハ所謂簡易渉獵ノ便ヲ假テ支那學問ノ概旨ヲ得ルニ於ケル益思ヒ半ニ過クルモノアラン是弊舖藝林ノ爲之ヲ發兌シテ世ニ紹介スル所以ナリ

明治廿四年十一月八日印刷
同　廿四年十一月十日出版

版權所有

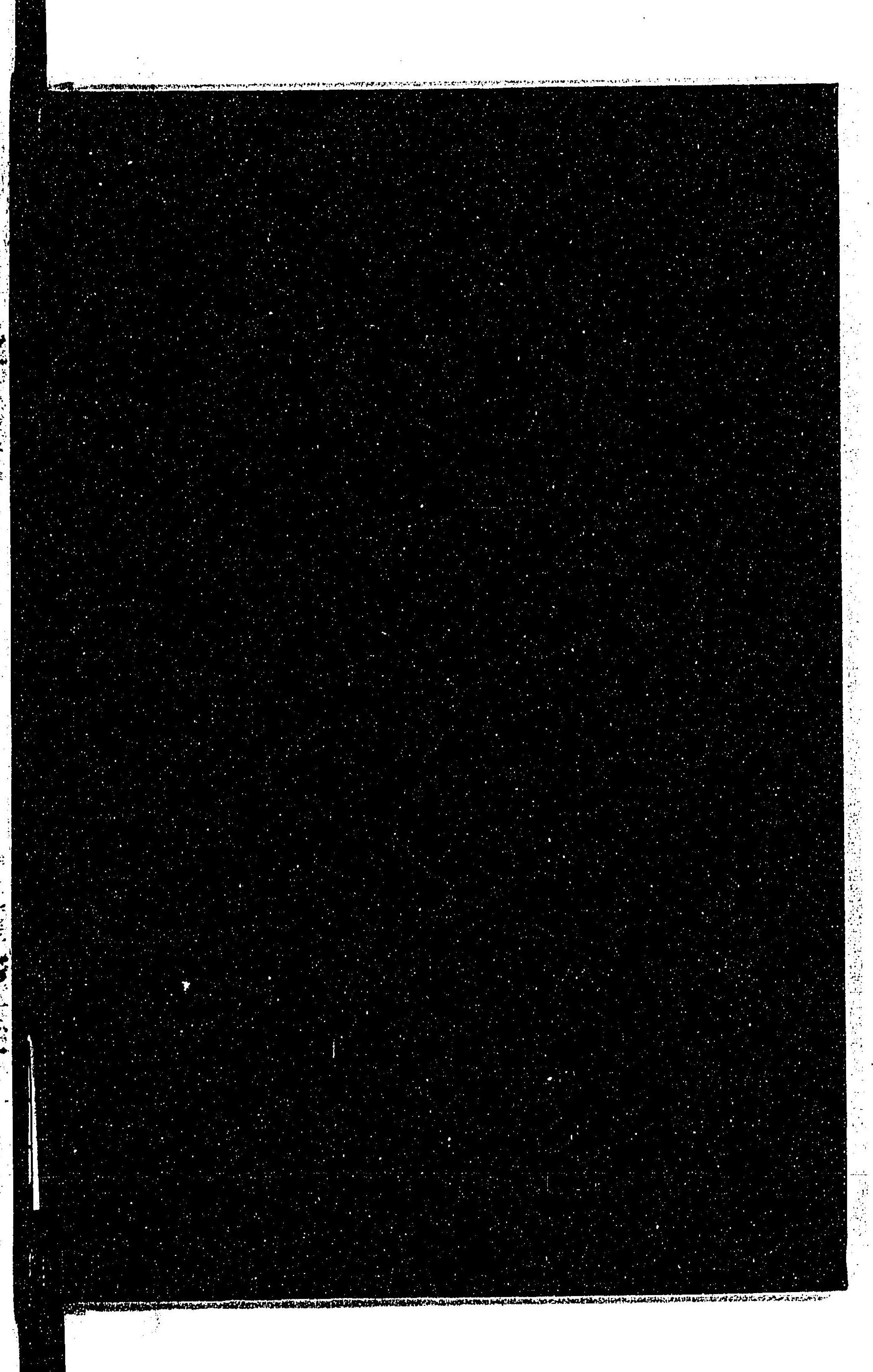
校訂兼編輯者　（佐藤改）今泉定介　東京小石川區西江戸川町一番地
同　畠山健　同　牛込區築土八幡町二十三番地
發行兼印刷者　吉川半七　同　京橋區南傳馬町一丁目十二番地
關西大賣捌所　松村九兵衛　大阪南區心齋橋南一丁目
發賣人　林平治郎　東京日本橋區箔屋町八番地
印刷所　必昇社　東京々橋區鎗屋町九番地

エトA78

各府縣發賣所

東京日本橋通三丁目	丸善書店
同　京橋區尾張町	東海堂
同　同　三十間堀	良明堂
同　神田表神保町	中西屋邦太
大坂備後町	梅原龜七
同　同	吉岡平助
同　北久太郎町	柳原喜兵衛
同　久寶寺町	三木佐助
同　南久寶寺町	前川善兵衛
同　心齋橋南	嵩山堂
京都新町通	便利堂
同　寺町通	梅原支店
同　河原町二條下ル	大黑屋書舖
熊本新二丁目	長崎次郎
神戸相生橋東	吉岡支店
佐賀白山町	河内壯助
愛知名古屋本町	川瀨代助
靜岡新通一丁目	勝見儀助
同　掛川	三原屋甚藏
石川金澤	近田太平
同　同	雲根堂
新潟新潟市	林富吉
同　水原	西村六平
同　長岡	目黑十郎

新潟長岡	上田屋治平
長野善光寺前	西澤喜太郎
同　松本	水琴堂
同　小諸	小山佐傳次
山梨甲府八日町	五明堂
群馬前橋本町	煥乎堂
宮城仙臺國分町	金港堂
同　同	高藤書店
同　同　大町	正々堂
岩手盛岡中橋通	便益堂
山形八日町	五十嵐太右衛門
同　酒田	白崎善助
秋田大町	本間金之助
北海道函館	魁文社
同　札幌	石塚猪男藏
福島福島町	萱間左右太
栃木宇都宮町	正々堂
同	集英堂
茨城水戸上市泉町	川又銀藏
同　石岡	高野清助
同　古河	高木文正堂
千葉佐原	朝野利兵衛
同　千葉	多田屋支店
同　佐倉	村山書房



914.5
H997
I